

島 根

2008年 光村図書出版社(株)
高校教科書【美術 I】



支局長 からの 手紙

初めてこの建物を見たときの感動は忘れられません。夏の青空に石州瓦独特の赤茶色が映え、どっしりとした安定感がありながら、繊細さや、洗練された美しさも感じさせます。益田市の県芸術文化センター「グラントワ」は、どのようにして造られたのか。今月の開館10周年を機に、設計者の建築家、内藤廣さん(65)に写真にお会いして聴くことができました。

屋根と壁に計28万枚も施された石州瓦の美しさが際立つグラントワですが、優れた性能にまず着目し、採用の検討が始まったそうです。当時問題になっていた酸性雨に耐えられるものは、現代建築の材料にはほとんどなく、1200℃1300度という高温で焼くために変質しない石州瓦で、建物を「レインコートのように包む」発想だったそうです。

とはいえ、壁に瓦を使うのは前代未聞です。内藤さんは石州瓦の歴史を学ぶ一方で、専任のスタッフを置いて事務所に模型を作り、1年がかりで研究したそうです。ですから「空の色を映し込んで千変万化する」というグラントワを象徴する壁の美しさは、設計の経緯からすると実は「偶然の産物だった」と明かしてくれました。



建物に宿る心

館内には、大小2ホールの「いわみ芸術劇場」と「石見美術館」目に見えている。そう言わせない

があります。大ホールの収容能力は約1500人。内藤さんは、人口5万人の都市にこの大きな建物を造ってよいのかと心配になり、澄田信義知事(当時)に、ホールは半分の収容人数にし、美術館も小ぶりにしてはどうか、と尋ねてみたそうです。すると知事は「財政が厳しく、これまで石見(地域)になかなか資本投下できなかった。(自身)県政最後にせめて文化の拠点を作りたい」と志を語り、一流アーティストを呼ぶのに必要な規模だと説いたそうです。

計画策定から完成までの5年間、県は深刻な財政難のため、公共建築物の建設先送りなど、財政緊縮策を取らざるを得ない状況でした。その中で推し進められた訳ですから、内藤さんは「大変な責任を感じた。失敗したら、ハコモノと言われるのは目に見えている。そう言わせない

ために心を砕いてきた」と当時の心境を語ってくれました。10年を経た内藤さんの感想は「いいですね。古くなっていない。たくさんの人に愛され、大切に使われている感じがとてもいい。建築家冥利に尽きる」。約80人の市民ボランティアが生け花を飾ったり、フロントを手伝ったりして支えています。また、市民音楽家も参加して、合唱や弦楽、邦楽のフランチャイズ4団体を作り、10周年のイベントでも活躍しました。自主企画も多く「都会から離れたところで攻め続けている。文化が生まれてきている」と評します。

今年初めて出合った私が感動したのも、培われた文化と地域住民の心が建物に宿っているのを感じたからかもしれません。屋根や壁は、手を入れなくても100年は持つそうです。地元でそれだけ愛され続けることを願います。

【松江支局長 谷由美子】

